

献呈の辞

村田彰教授、そして馬場啓一教授は、二〇一九年三月をもって定年により流通経済大学法学部を退職されました。そこで、法学部は、本学部の研究教育における両教授の顕著な功績を讃え、また、本学部の発展に多大な寄与をされたことに感謝の意を込めて、ここに流経法学第十九巻第二号を「村田彰教授・馬場啓一教授定年退職記念号」として編集し、両教授に献呈いたします。

村田彰先生は、法政大学大学院社会科学専攻博士課程を修了され、いくつかの大学で教鞭をとられた後、二〇〇一年四月、本学に法学部開設スタッフとして着任されました。二〇〇五年四月からは、第二代の法学部長に就任され、その後二〇一五年三月まで五期十年の長きにわたり情熱をもって学部運営に当たられ、今日の法学部の礎を築かれました。その就任はちょうど法学部が完成年次を経過した時期にあたり、村田先生は、まだひ弱な面も見られた法学部の先頭に立って、法学部の存在を盤石なものにしようとする改革に邁進されました。いわゆる「特別クラス」制度をはじめとする、今日の法学部の教育研究体制のほとんどは、こ

の村田学部長時代にその枠組が形づくられたものと言っても過言ではありません。中でも特筆すべきは、国際的な学术交流への貢献です。当時発展目覚ましかった東アジア地域に注目され、台湾の淡江大学や静宜大学、中国の海南大学などとの交流事業に率先して乗り出されました。それは今日、静宜大学および海南大学との間では交換留学生制度として結実し、来年度も三名の留学生を法学部に迎える予定です。

法学部長としての功績の紹介が先になりましたが、村田先生について語るとき欠かしてはならないのは、この法学部長在任期間中ずっと、先生の研究活動が一時も途切れることなく、むしろ常人を超えるペースで、実に多くの優れた学術論文を発表され続けたことでしょう。そのお仕事ぶりは、大学人の鑑ともいべきものでした。

村田先生の専攻は民法学で、若い頃から一貫して意思表示論や意思能力論を中心に研究に熱心に取り組まれ、近年はこれらの研究を踏まえて成年後見制度にも研究領域を拡げています。そして、もう一本の研究の柱は、温泉権・温泉法や入会権をめぐる研究です。長野地方を主たるフィールドに継続的に法社会的な調査にも取り組んでこられました。また最近では、台湾や韓国といった東アジア諸国との比較法研究も積極的に手掛けておられます。さらに、こうしたご自身の研究に加えて、何冊もの教科書や研究書を本学部に籍を置く教員を中心に執筆陣を組織して編集され、他方では、日本成年後見法学会で常任理事、日本温泉協会で常務理事を長年にわたって務められ、両学会の舵取りを担われました。

学生教育の面に目を転じて、一つだけ挙げるなら、本学の大学院法学研究科において、数多の中国からの留学生の研究指導を担当され、それぞれに立派な修士論文を書き上げさせた手腕は、高く評価されて然るべきです。

村田先生は、このように教育上、学術上そして学部運営上の功績が極めて顕著でありましたところから、退

職後の五月、流通経済大学名誉博士の称号を授与されています。

村田先生は、授業期間中、週のうち数日は、大学内に泊まり込んで仕事をするのを常態とされていました。個人的な話になりますが、村田先生と私とは研究室が隣り合わせであったこともあり、泊まり合わせたときには、必ずと言ってよいくらい私の研究室をお訪ねくださり、ともすると深夜まで、法学部のカリキュラムの話から、刑法の責任能力論、さらに大学教員としての心得まで実に様々な話題について語り合い、時に貴重な教えを賜る機会を得ることができました。私にとって多分、村田先生は、本学の中でもっとも長時間、二人きりで時を過ごした先生になるものと思いますが、今更ながらその時間の掛け替えのなさを痛感いたします。

馬場啓一先生は、早稲田大学は第一法学部のご出身ですが、商業広告業界へと進まれ、CMディレクターとしてテレビCMの制作等に携わられた後、文筆をもって生業とされ、評論やエッセイから小説まで様々なジャンルを股に掛け、男性ファッションや男のダンディズムから、ジャズ音楽や映画、ミステリーやハードボイルド小説、さらに人生論まで多彩なテーマを縦横無尽に行き来して、優に百冊を超える夥しい数の著書を世に送り出しました。こうした活動の中で二〇〇五年四月、本学から一般教養科目「日本文化論」や「現代文章論」の講義担当者として招聘されて法学部所属の特任教授に就任、二〇一〇年四月には教授に任用替えとなり、大学の広報誌の編集等の業務にも関わられました。

馬場先生は、アカデミックな研究者タイプが多い本学教員の中にあって異彩を放ち、その講義は毎年度、本学全体で一、二を争う数の学生が押し掛けて教室に入り切れず履修登録が抽選になるほどの人気を博していました。

私が個人的に馬場先生をめぐって思い出すのは、法学部朋林会のジャズコンサートです。朋林会というのは

法学部教員の親睦組織ですが、馬場先生の企画により二〇〇五年秋に東京・青山の洒落たバーを貸し切りのようにしてライブ演奏会を開催したのでした。今やこのことを知る教員もめっきり少なくなつた朋林会史上空前最後のイベントでしたが、馬場先生が本学赴任前に活躍の舞台としてきた私の知らない世界の一端を垣間見ているような心地で過ごした一刻でした。

村田先生、そして馬場先生のご退職は、法学部にとつて極めて大きな損失ですが、私たちは、これにより生じた空白を少しでも埋めるべく努力を続け、両先生が法学部に残して下さつた成果を守り育てていく所存です。現在、村田先生、馬場先生とも、ご体調必ずしも万全ならずと伺いますが、くれぐれもご自愛いただき、末永く法学部の向後の歩みを見守ってくださいますようお願いして止みません。

最後に改めて村田彰、馬場啓一両先生に心からの感謝を申し上げ、両先生のこれからの人生にも幸多からんことをお祈りして、結びの言葉といたします。

二〇一九年十二月

法学部長 信 太 秀 一